

12. 労働生産性の向上(続き)

現代的産業の生産力要因

今回の課題

- ✓ 現代産業の三つの規定的要因を明らかにする
 - 協業
 - 分業
 - 科学の適用
- ✓ 資本主義社会が**知識社会**かつ**組織社会**であることを明らかにする

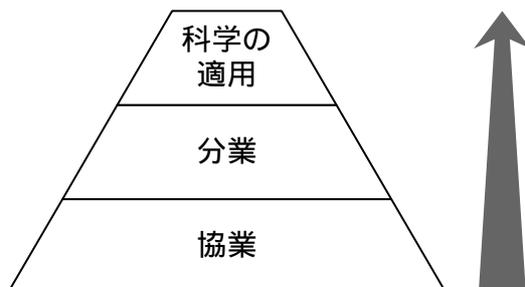
今回の目次

生産力の三つの要因
イノベーション
協業
分業
科学的知識の意識的・計画的適用

イノベーション

- イノベーション
- 企業自身によって引き起こされる生産力上昇
 - 1. プロダクト・イノベーション
= 新生産物の開発
 - 2. プロセス・イノベーション
= 生産過程の変革

現代産業の生産力要因



1. 協業

- 一企業の中で多数の従業員が互いに協力しあいつながら労働すること
- “集める”という原理

企業での協業の特色

- 一言で言うと、アカの他人どうしが協力しあっているということ
 - 企業内のクローズドな生産過程での協業が始まる前に、企業は、市場におけるオープンな流通過程で労働力を買う
 - 市場における流通過程で同じ企業に労働力を売るのは、バラバラなアカの他人どうし
 - したがって、企業内の生産過程で協業するのも、バラバラなアカの他人どうし

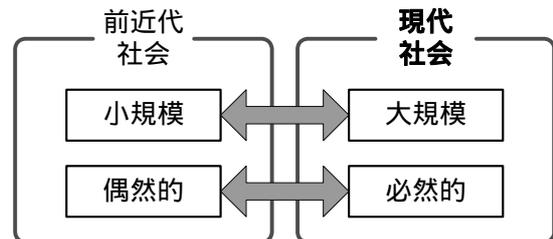
権威と計画

- 権威**
 - 全従業員レベルで協力しあうには、従業員の外に単一の意志が必要
- 計画**
 - 全従業員レベルで協力しあうには、あらかじめ作業予定とか作業手順とかを決めておくことが必要

労働の社会的生産力

- 個人の生産力の総和を超える社会的生産力が生まれる。
 - 1+1が3にも4にも
- しかし、個人がこのような社会的生産力を発揮できるのは企業に雇用されているかぎりである。
- したがって、社会的生産力は企業の生産力である。

現代社会の協業 と 前近代社会の協業



2. 分業

- 集められた労働の個々のパーツを、個々の労働者に割り振ること
- “分ける”という原理
- ここで扱うのは企業内分業

企業内分業と社会的分業

- 企業内分業**
 - 商品交換を経ずに直接的につながる = 密結合
業務計画にもとづいて、業務命令に従って行われる
上流から下流へ、時間のロスを省き、在庫をなくす
- 社会的分業**
 - 商品交換を通して間接的につながる = 疎結合
商品が売れて初めて私的労働は社会的分業の一環になる
商品が売れるかどうかはわからない

分業の固有のメリット

- 分業のメリットと思われているものの大部分は、実は協業のメリット
- 分業の固有のメリットは、
 1. 労働力の熟練
 2. 労働手段の細分化

企業内分業の行き着く先

- もし科学の適用がないならば、...
- 分業の固定化(一生涯一労働)
 - 労働力の一面的発達
 - 専門家ではなく専門バカ

3. 科学の適用

- 科学の適用 = **テクノロジー**
- 熟練を解体して、**機械設備**で置き換える
- 機械設備の配置に応じて、**協業・分業**のやり方も決まってくる

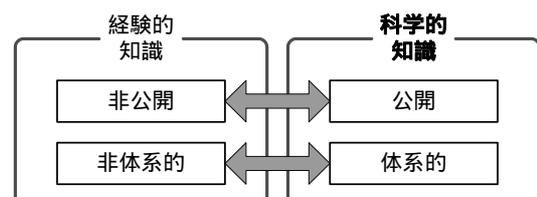
知識の利用の二つのモデル

1. 職人モデル
 - コツとカン
 - 経験で体得
 - 熟練労働で大きなウェイト
2. 現代モデル
 - 科学
 - 学習で獲得
 - 複雑労働で大きなウェイト

科学的知識の特徴

1. **公開**
 - だれにでもアクセス可能
2. **体系的**
 - なんにでも応用可能

科学的知識と経験的知識



協業はどうなる？

- 機械設備の体系性は、協業を必然的にする
 - しらないうちにいつの間にか協力しあっている
- 機械設備の協調作業を通じて、協業が行われる

分業はどうなる？

- システム全体
 - 熟練に代わって機械設備
 - 固定的な分業に代わって流動的な分業
 - 分割の仕方も客観的・科学的に
- 従業員
 - 一面的発達に代わって全面的発達
 - 専門バカに代わって専門家

現代社会の特徴と生産力要因

- **知識社会**
 - 科学的知識が決定的な役割
- **組織社会**
 - 機械設備によって協業・分業が必然的に
 - 組織の力は企業のパワー

イノベーションの結末

- 私企業の内部に社会が形成されている
- 企業間(あるいは企業と消費者)の関係は市場経済
 - ⇕ しかし
 - 企業内は計画経済
- 個人と較べて企業の力は強大になるが,
 - ⇕ しかし
 - 個人にも全面的な発達を求める

今回の結論

- ❖ 現代産業の三つの要因は
 - ◆ 協業
 - ◆ 分業
 - ◆ 科学の応用
- ❖ 企業間の市場経済vs.企業内の計画経済
- ❖ 企業のパワーvs.個人の全面発達